第5回中心部震災メモリアル拠点検討委員会　意見整理表（ホワイトボード）

参考資料２

		要素						
		①空間	②施設	③展示	④広場	⑤象徴的存在	⑥モニュメント	⑦音
役割	(0)共通	集客力や集客するための目配り（アクセス、駐車場など）が大事 日常と災害の接合を図り、日常の中に災害の記憶が引き出される環境をつくることがミッション。大変なことを忘れないためではなく、同じことを繰り返さないために災害の記憶を日常の中に引き継ぐ文化をつくる 駅のような役割を持つ場	震災の記憶は地域毎の記憶。市民センターを活用して地域に記憶が生きる状態が作り、その活動を中心部拠点として支えることが必要 ストックではなくフロー（人の動き）をつくり出す場が必要であり、箱物をつくって終わりではない メディアテーク、サポセン、メモリアル交流館、市民センターで求められる機能は、フューチャーセンター、新市庁舎でも求められることから、施設の統廃合や再配置も考えていくべき ミッションと活動内容を最優先に考え、その結果として施設が必要ならば、人が集まる中身を真剣に議論する必要がある。アクセスが良くても、行きたいと思えるものがなければ人は集まらない	震災に関する、写真や映像や言葉を直接扱うことで伝える箇所と、訪れる人が想う何かが、できれば同時に影響し合うような展示を試行錯誤してゆく 「ここに行けば防災教育をやった」という免罪符のような場所として、表面的な理由で来た人にも内実が伝わるようにつくれれば良いのではないか	人の動きをつくりだすために、施設よりもイベントや普段使いができる広場を重視	人々の身体と、響きあうには・・・	訪れる人の身体（の介入）によって変化していくような場 有効に機能するモニュメントは、各地域で住民がメンテナンスすることを前提としたもの ポーランド・クラクフのゲット一跡地にある広場と椅子のように日常を邪魔しない広場・モニュメントで記憶を想起させる 地震という性質を考えると「景観・自然・地球」に配慮すること	
	(1)多様な経験の共有・蓄積・発信		語り部の話を聞ける空間が必要	常設展示が必要ならば観光や教育や目的の範囲で考えること 修学旅行・企業研修・町内会視察等のニーズを充足するために、被災体験をビジュアル的に追体験できる展示は必要 世界中の災害の歴史を可視化し、現在の変わりゆく状況をタイムランで追えるようにする。かつ、そこには福島原発のリアルタイムの現場状況なども含めることは必然であると思う。その一番の理由は、これから起こるかもしれない災害、事故において正しい情報を発信する場として意味を持つべきでるから 住民の声や人間のにおいが感じられるものが必要			訪れた人が手を合わせる拠り所が必要 まだ2500名以上が行方不明であることから、祈りの場が必要 わかりやすい像ではなく、年輪のように増えていくなど、何年経ったか目に見えるようなモニュメントがふさわしい 石巻などにある津波高さを示す標識には、想像を刺激する力がかなりあり、見た人が考える力になる	
	(2)新たな知恵の創造と社会への実装		防災を学ぶ リピーターを作り、人生で何度か訪れる場所にすることが必要。そのためにはカフェやレストランの充実も大事	歴史と文化を展示に入れる			ロンドンやポーランドにあるブルー・プラークのような何があったか伝えるプレートを市のあちこちに設置し、定期的に更新してことで学びの機会を作る	
	(3)超長期の記憶の継承						震災はあり得ないようなことであり、出来事の大きさ・あり得ない経験を可視化するモニュメント あり得ないものを可視化するモニュメントとして、胎内くぐりのように暗闇に入り出てくるようなものがあれば、子供も喜ぶ	毎日決まった時刻を公的な場の鐘などの音で知らせることで身体化する ポーランド・クラクフの時計台で毎日繰り返されるトランペット演奏のように毎日14時46分に、人が身体を使って音を鳴らすことで人から人に記憶をつなぐ
	(4)広域的な連携	資料レイアウト 右 A3横　左 A3横		福島のことを含む東日本大震災の全体的な説明				

要素									その他
⑧行事	⑨歌	⑩メディア	⑪アーカイブ	⑫未来創造（フューチャーセンター）	⑬人材	⑭組織	⑮財源	⑯事業	
	それぞれの歌を歌う、その中から、どんな歌が人々の中に残ってゆくのか 歌を作っても歌える場がない。時報のように生の音が定期的に響き渡る空間が必要				呼ばれて集まる「参画」ではなく、多様な活動の主体的な集まりであるべき ネットワーク、アーカイブ、アート、協働、資金などそれぞれの取組みにプロフェッショナルが主体的に関わる状態が必要 キュレーターやアーキビストなど、事業に応じた専門家が必要（市役所の順送り人事ではない）	公共性やミッションが広く認知され、責任と実行力を持つために、社会的なバックボーンを持つ強力な組織が必要 この検討で必要な組織とは施設の有無に関わらず社会的な使命を遂行する組織 実際に事業が動いていく中でも、この拠点が人々の求めに応えているかどうかを常に検証し、更新していくことが必要 運営組織は柔軟で社会変化に合わせられる組織が望ましい ミッションをはっきりさせることが必要	税や入館料に頼らず、メモリアルという枠組みにもとらわれない多様な財源を確保することが必要	実践者と専門家の研究成果を定期的に発表する 既にある団体や個人、語り部、新たな活動者との連携	中心に集めるものだけではなく、地域にあるモニュメントなどの分散型も許容する報告書にしたい 拠点の特性に応じた立地場所を検討することが必要 人が力点になる
地域毎の取組みの競争や情報共有を図る大会等の行事が必要 共助の先進例を学べるイベント			仙台の中心部に集めようとせず、あるべきところに置き、連携する 既存施設と連携するなど、資料に応じた役割分担が必要 膨大に出版された震災に関する本の系譜を知りたい、海外に発信する場合、資料の翻訳に特化したアーキビストの方の働きが大切になる 語り部が発話する場、語り部を発掘する場として編集部のような機能があれば良い	災害に係るいろいろな活動をつくれるアトリエのようなスペースが必要 緊急時にも役割を果たせるように遠隔会議の仕組みが必要 「友の会」のように市民が参加しやすくなる仕組みを持つ	未体験者も含めて語り部の発掘と連携が必要 伝える人、学ぶ人、学ぶ仕組みが必要		観光客を取り込み、入館料で自立できるようにすべき		
			何でもかんでも集めても残らない。意味のあるものを1つ1つストーリーのように残すためにも、物語を再構築する場が必要	国連のSDGsや学術会議のフューチャーアースなどと連携しながら、台風、大雨、河川氾濫などを含めた新たな災害への想像力を育む場であるべき いろいろな持ち込み企画のほかに自主企画を生み出させるようにする 台風などを含めて新たな災害が起きてくる中で、いつまでも東日本大震災の被災地が「ザ・被災地」と言えなくなる。震災の経験を共有するだけではなく、未来の創造・探求を通じて、ザ・震災を超えて文化をつくるようなことを、自主企画でやることが大事	リスク教育プログラム（堤防が切れる前提の暮らしなど、今まで培った災害文化） 公的・公共的・私的なものとは何かを学び合う場が必要（常に変化し続けている） 生きる力を養う教育が必要 広島の被爆体験のように未体験者も伝えられるようになる人材育成が必要			学ぶ機会をつくる	分散を維持するためには遠心力と求心力のバランスが大切。求心力を持って地域の活動がバラバラに壊れないように支えたり、中心にある力を遠心力で広げてパワーアップするようなことを実施するなど、求心力と遠心力のバランスを維持するものが拠点
	インドネシアの「スモン」、神戸の「しあわせ運べるように」という歌。教訓とつながっていて、スモンで実際に命を救われた方もいる				第二語り部として未体験者も継続的に語れるような仕組みが必要		条例を作るなど長期で取り組む仕組みを考えることも必要		
						既にあるネットワークを活用する方が良い 収蔵品を持たないアートセンターのように、独自コンテンツを持たずとも、既にあるメモリアルの取組みと連携・調整することで、様々な企画を続けていくという方法もある	様々な人とのつながりが中心部拠点の価値を決めることから、この取組み・議論を他地域に今から発信し続けることが必要		

資料レイアウト

右 A3横　左 A3横